

2017年2月7日
博報堂 新しい大人文化研究所

定年後に向けて期待と不安にゆれる50代「未定年」層
新大人研、「未定年層」に特化した研究・マーケティングサービスを開始
50代男性の意識調査を実施。

博報堂の専門組織である博報堂新しい大人文化研究所は、40～60代を“新しい大人世代”と呼び、その意識と消費に関する調査研究を行っています。

このたび、50代男性のセカンドライフ（定年後、60歳以降の生活）に焦点をあてた調査を実施しました。

■セカンドライフ（定年後、60歳以降の生活）に対する「期待指数」平均は62.3ポイント。

“自分の定年後（または60歳以降）の人生を、どの程度楽しみにしているのか”を、最大限に楽しみにしている場合を100として回答してもらったところ、平均値は62.3ポイント。

■将来や老後に対する「不安指数」平均は57.2ポイント。

“自分の定年後（または60歳以降）の人生に対して、どの程度不安を感じているか”を、最大限に不安を感じている場合を100として回答してもらったところ、「期待指数」と同様、50を超える数値となり、定年後の生活への期待と不安が入り混じる心情が伺える。

■セカンドライフに向けた「準備指数」平均は31.2ポイント。

“定年後（または60歳以降）の仕事や暮らしに向けて、現時点でどの程度準備を進めているのか”を準備万端整っている状態を100として回答してもらったところ、31.2ポイント。老後の準備は進行途上という人が多い。

新しい大人文化研究所では、意識調査の結果を詳細に分析し、まるで未成年のように未来にゆれる心情を持つ50代、定年を控えた層を「未定年」層と名づけました。また、セカンドライフへ異なる向き合い方をしている4つのグループを抽出し、自分が生きるため、自分のしたいことのため、絆を深めるための3つの投資行動が行われていくと考察しています。

（詳細な分析結果は、次頁以降の資料をご参照ください）

シニアの入口に立つ「未定年」層は、日本が迎える超高齢社会を形作っていく層であり、彼らが考える未来が、日本の超高齢社会の未来となると考えられます。言わば、日本の超高齢社会のキー世代です。

新しい大人文化研究所は、男性のみならず女性も含めたこの「未定年」層の研究・マーケティング活動を開始。企業やメディアの皆さまとも協働を図りながら、多くの未定年層のライフプランニングが活性化することを目的に活動し、超高齢社会を明るい未来とするための貢献をまいります。

本件に関するお問い合わせ： 博報堂 広報室 藤井 TEL:03-6441-6161
博報堂 新しい大人文化研究所 山中・山本 TEL:03-6441-4366

50代のセカンドライフへの気持ち

■セカンドライフ（定年後の生活）に対する「期待指数」「不安指数」「準備指数」を、年齢別に見ると、54歳（50代前半）までは紆余曲折、55歳を超える（50代後半）と、期待が徐々に高まるとともに、不安は減少傾向に向かっている。「55歳」が意識変化のターニングポイントとなっていると考えられる。

セカンドライフへの期待指数平均：62.3
 セカンドライフへの不安指数平均：57.2
 セカンドライフへの準備指数平均：31.2

*指数全体最高値を100とした時

Q：＜期待指数＞

あなたは、ご自分の定年後（または60歳以降）の人生を、どの程度楽しみにしていますか。100点満点で点数をつけてください。

※全く何も楽しみにしていない場合が0点、定年後（または60歳以降）のことを非常に（最大限に）楽しみにしている場合を100点としてお考えください。

Q：＜不安指数＞

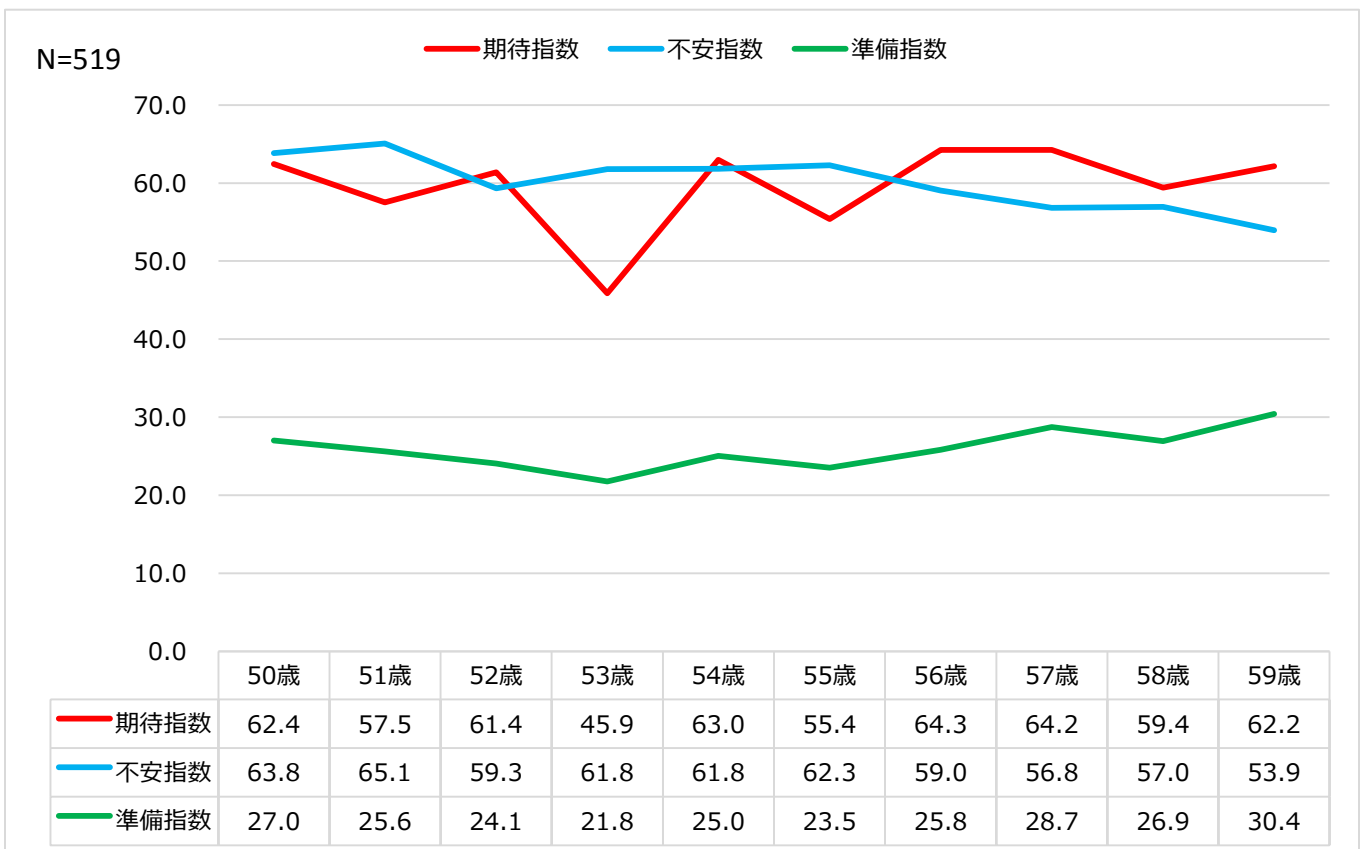
あなたは、ご自分の定年後（または60歳以降）の人生に対して、どの程度不安を感じていますか。100点満点で点数をつけてください。

※全く何の不安もない場合が0点、定年後（または60歳以降）のことを非常に（最大限に）不安を感じている場合を100点としてお考えください。

Q：＜準備指数＞

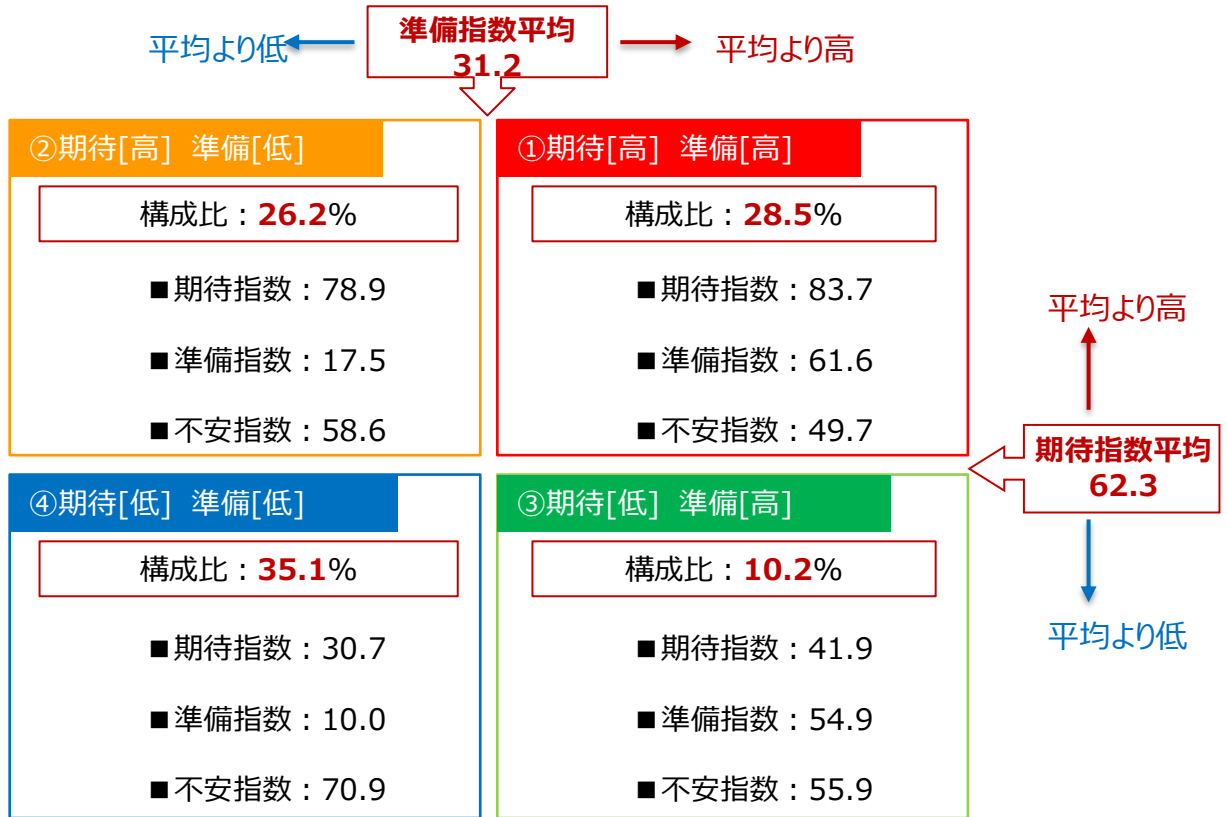
それでは、定年後（60歳以降）の仕事や暮らしに向けて、現時点でご自身の準備は実際にどの程度整っているとお考えですか。

全体的にみて、準備万端整っている状態を100%として、現時点で実際に何パーセント整っているかをお答えください。

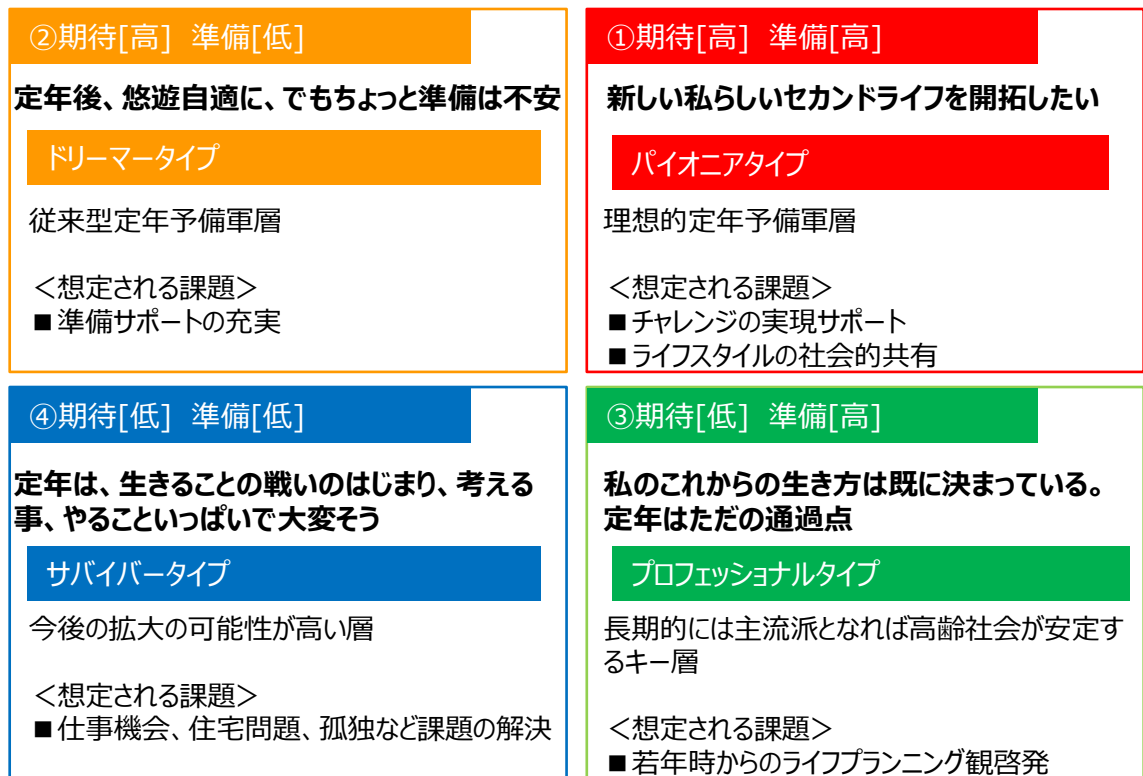


セカンドライフへの意識による「4つのグループ」

■セカンドライフへの期待と不安を、「期待指数」と「準備指数」の平均値を基準値として4つのグループに分けると、期待を平均以上に持っている層が半数を超える。一方で、期待も準備も低い層が最も多く35.1%を占める。



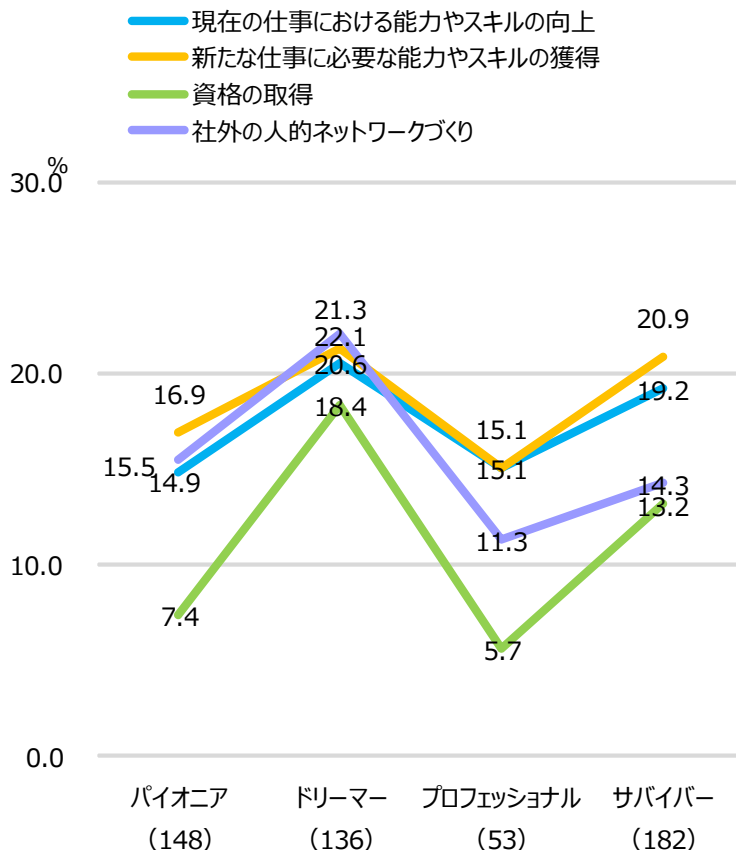
■これらの4つのグループは、属性やセカンドライフに対する意識に違いが見られ、【パイオニア】【ドリーマー】【プロフェッショナル】【サバイバー】と位置づけられる。また、それぞれのグループで考えられる課題にも違いがある。 ※詳細はP 6～の参考資料に記載。



セカンドライフを迎える50代の準備と期待

■セカンドライフを迎えるにあたって必要な準備とは何かを尋ねたところ、60歳以降に必要な資金や健康など“生きていくために必要な準備”に加え、「現在の仕事の能力・スキル向上」「新しい仕事の能力・スキル獲得」「資格」「社外の人的ネットワーク」など、いわば、“可能性の幅を広げるための準備”も必要であると感じられている。これらの傾向は【ドリーマー】や【サバイバー】が他のグループを上回っており、現状準備が足りていないとする層でこれらの準備の必要性が感じられている。

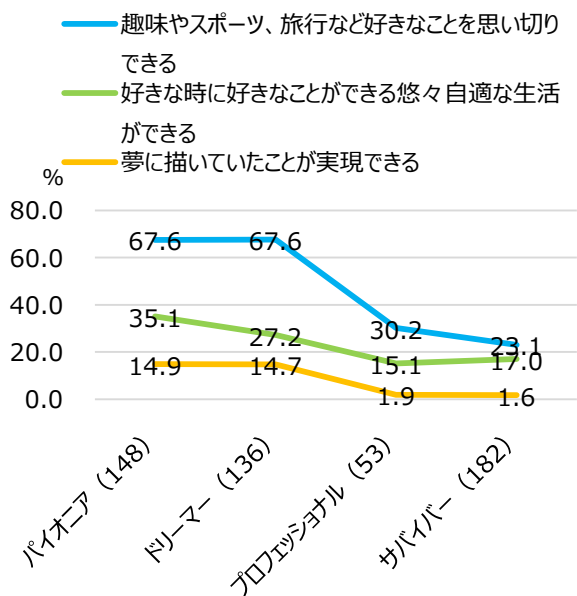
■定年後（60歳以降）のために必要な準備



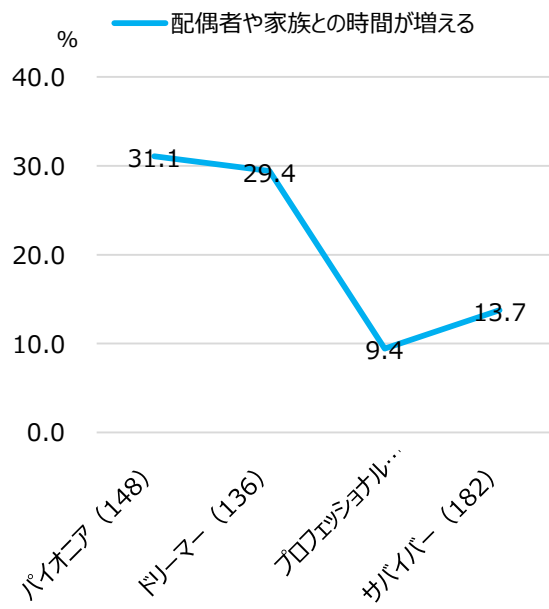
■定年後（60歳以降）に期待することを尋ねたところ、セカンドライフに期待が高い【パイオニア】【ドリーマー】では、「趣味・スポーツなど自分の好きなことができる」「好きな時に好きなことができる」「夢に描いていたことができる」などの意向が他グループと比べて高く、（仕事を中心から）自分を中心にした生活をしたいという考え方が強まっている。

■またこれらのグループでは、「配偶者や家族との時間が増える」ことへの期待も強く、家族をセカンドライフを充実させるための重要なものの一部として捉えていることが伺える。

■定年後（60歳以降）に期待すること①



■定年後（60歳以降）に期待すること②



【調査結果からの考察】

セカンドライフを迎える50代において、今後活性化する可能性が高い「3つの投資」

■50代は、消費よりも投資に意識が向く層であり、新しい行動を取り始めるこれからのシニアジェネレーションであると推察される。

1 ライフライン投資

金融知識・健康知識など、自分が“生きる”ための投資に関しては従来にも増して活性化していく可能性がある。例えば50代が金融知識を高めるための金融商品など、ライフラインを強化するための投資は今後活性化する。また、高齢となった親が介護を必要とするケースも増加し、自分の生活を守りながら介護をするための知識獲得サポート、施設への支払いなどもライフラインの投資として発生する可能性がある。

2 セルフプロジェクト投資

会社を辞めた後も長生きする時代、自分の好きな仕事、好きな趣味、“自分のしたいこと”をやるためのセルフプロジェクトを計画し、実行する人も拡大していくものと思われる。それを実現するための知識や資格の獲得、人脈の拡大やコミュニティへの参加費用など、自分が自分らしく生きるための投資も拡大するのではないか。

3 絆投資

共に長生きをするパートナー、家計を共にするパートナーの存在の必要性は、セカンドライフへの期待感の違いからも見てとれる。本格的なセカンドライフに入る前に、例えば旅行やギフトなど、絆を深めるための投資も大きくなる可能性がある。

<調査概要>

調査主体：博報堂 新しい大人文化研究所

調査対象：①定年前グループ（50代男性有職者）、②定年後グループ（60～65歳男性）

対象エリア：1都3県（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県）

対象者数：①定年前グループ519サンプル、②定年後グループ206サンプル

調査手法：インターネット調査（マクロミルパネルにて実施）

調査日時：2016年8月

パイオニアタイプ の特徴

①期待[高] 準備[高]

構成比：28.5%

新しい私らしいセカンドライフを開拓したい

- 定年を転換点と捉え、定年後は、仕事の量は減らし、仕事以外のこと、時間、人間関係が増えることに期待が大きい。
- 定年後の仕事は、リタイア希望者が多かったり、今とは違った仕事を希望する人が多かったりと多様であるが、いずれにしても今とは異なる環境を想定している。
- 首都圏の50代男性では2番目に多く、セカンドライフを機に新しいライフスタイルを開拓したいと思っている層。

<p><プロフィール></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 平均年齢：55.0歳 50代前半：40.5% 50代後半：59.5% ■ 職業 役員：4.7% 会社員・公務員：85.1% 個人事業：10.1% ■ 未既婚 未婚 14.2% 既婚 82.4% 離死別 3.4% 	<p><特徴的な回答 N=148 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 定年後（60歳以降）の仕事の量（*） ・今よりは抑えて働きたい 65.6%（57.9%） ■ 定年後（60歳以降）に希望する働き方（*）（MA） ・独立し、フリーとなって働く 24.7%（17.2%） ・新しい事業を起業する 11.8%（6.8%） ・地方に移住して働く 7.5%（4.7%） ■ 定年後（60歳以降）期待していること（MA） ・好きなことを思い切りやりたい 67.6%（48.2%） ・悠々自適な生活 35.1%（24.7%） ・配偶者/家族の時間 31.1%（22.4%） ・勉強/学習する時間 20.9%（14.1%） <p>* 特徴的な回答： ・各層で全体に比べ反応が高かった回答を掲載 ・（ ）内のスコアは全体（N=519）のスコア ・（*）の質問は今後働く意向のある人ベース（N=337）のスコア</p>
---	---

ドリーマータイプ の特徴

①期待[高] 準備[低]

構成比：26.2%

定年後、悠遊自適に楽しく過ごしたい、でもちょっと準備に不安

- 定年を転換点と捉え、定年後に期待を持っているが（50代前半の構成比が高いこともあってか）将来が見えにくい分、老後の資金などに不安もある。
- 平均年齢は低めで、同居に子供がいる比率も高く、会社に雇用延長制度のあるホワイトカラーが中心。
- 定年後に必要な準備として、社外ネットワーク、資格の取得など、将来に対して選択肢の幅を広げるような準備も必要だと考えている。

<p><プロフィール></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 平均年齢：54.0歳 50代前半：58.8% 50代後半：41.2% ■ 職業 役員：5.1% 会社員・公務員：81.6% 個人事業：13.2% ■ 未既婚 未婚 17.6% 既婚 79.4% 離死別 2.9% 	<p><特徴的な回答 N=136 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 定年後（60歳以降）不安に思うこと（MA） ・老後のお金 71.3%（63.6%） ・配偶者/家族の健康 39.7%（34.3%） ■ 定年後（60歳以降）に必要な準備（MA） ・社外ネットワーク 22.1%（16.4%） ・資格の取得 18.4%（12.1%） <p>* 特徴的な回答： ・各層で全体に比べ反応が高かった回答を掲載 ・（ ）内のスコアは全体（N=519）のスコア</p>
---	--

プロフェッショナルタイプ の特徴

③期待[低] 準備[高]

構成比：10.2%

これからの生き方はある程度見えてきている。定年は気にするものではなく、ただの通過点

- 役員、個人事業、自由業の人（定年のない人）が比較的多く、定年（60歳）を通過点と捉え、現役続行を想定する人が多い。
- セカンドライフの生活への期待度が低い、今と定年後（60歳以降）に変化が少ないため、取り立てて期待もしていないということだろう。
- 今を継続するため、必要と考える準備内容も少ない（準備指数が高めなのはそのためと思われる）。

<p><プロフィール></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 平均年齢：55.7歳 50代前半：32.1% 50代後半：67.9% ■ 職業 役員：11.3% 会社員・公務員：64.2% 個人事業：24.5 ■ 未既婚 未婚 13.2% 既婚 75.5% 離死別 11.3% 	<p><特徴的な回答 N=53 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 定年後（60歳以降）に期待していること（MA） <ul style="list-style-type: none"> ・悠々自適な生活 15.1%（24.7%） ・配偶者、家族との時間 9.4%（22.4%） ■ 定年後（60歳以降）に必要な準備（MA） <ul style="list-style-type: none"> ・資金の確保／資産形成 22.6%（34.3%） ・資格の取得 5.7%（12.1%） ・新たな仕事や移住の資金 3.8%（11.9%） ■ 定年後（60歳以降）に不安に思うこと（MA） <ul style="list-style-type: none"> ・老後のお金 50.9%（63.6%） ・親の面倒、介護 11.3%（23.9%） <p>* 特徴的な回答： ・各層で全体に比べ反応が低かった回答を掲載 ・（ ）内のスコアは全体（N=519）のスコア</p>
--	--

サバイバータイプ の特徴

④期待[低] 準備[低]

構成比：35.1%

定年は、生きることの戦いの始まり。考える事、すべきことが沢山で不安

- 期待度、準備度合いが低く、不安が最も高い層。このグループの構成比が35.1%と最も多い。
- 個人事業、自由業の人が比較的多いのは【プロフェッショナル】タイプと似ているが、定年後は今と同程度、あるいはそれ以上に働く必要を感じる人が多く、老後の資金のみならず、住むところがあるかなどの心配を感じている。
- 契約社員の比率が他のグループに比べてやや高い。

<p><プロフィール></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 平均年齢：54.2歳 50代前半：56.6% 50代後半：43.4% ■ 職業 役員：8.8% 会社員・公務員：68.7% 個人事業：22.5% ■ 未既婚 未婚 22.0% 既婚 64.8% 離死別 13.2% 	<p><特徴的な回答 N=182 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 定年後（60歳以降）の仕事の量（*） <ul style="list-style-type: none"> ・今と同じ程度働きたい 44.9%（33.2%） ■ 定年後（60歳以降）に不安に思うこと（MA） <ul style="list-style-type: none"> ・仕事があるか 51.1%（36.0%） ・住むところ 18.7%（11.0%） ・暮らしがイメージできない 12.6%（6.9%） ■ 定年後（60歳以降）に必要な準備（MA） <ul style="list-style-type: none"> ・新たな仕事や移住の資金 15.4%（11.9%） ・わからない 24.7%（16.6%） <p>* 特徴的な回答： ・各層で全体に比べ反応が高かった回答を掲載 ・（ ）内のスコアは全体（N=519）のスコア ・（*）の質問は今後働く意向のある人ベース（N=337）のスコア</p>
--	---

博報堂 新しい大人文化研究所 過去のレポート一覧

※過去のレポートは、下記URLにてご覧いただけます。

<http://www.h-hope.net/> (新しい大人文化研究所WEBサイト)

<http://www.hakuhodo.co.jp/> (博報堂WEBサイト→「ニュースリリース」→「調査レポート」)

【新大人研レポート “新しい大人世代” の～シリーズ】

- No.1 人生のとらえ方(2012.1.19)
- No.2 言われて嬉しい言葉(2012.2.1)
- No.3 コミュニケーション(2012.4.16)
- No.4 健康意識 (2012.5.31)
- No.5 お金に関する意識 (2012.8.27)
- No.6 社会意識 (2012.9.3)
- No.7 夫婦関係 (2013.2.26)

【新大人研レポート いま高齢社会は“新しい大人社会”へと大きく変化 シリーズ】

- No.8 その① おカネ (2013.07.31)
- No.9 その② 食 (2013.9.5)
- No.10 その③ メディア (2013.11.6)
- No.11 その④ 社会性 (2013.11.28)
- No.12 その⑤ クルマ (2013.12.25)
- No.13 その⑥ 住 (2014.2.4)
- No.14 その⑦ 旅 (2014.2.19)
- No.15 その⑧ 介護 (2014.3.28)
- No.16 その⑨ 孫 (2014.3.31)

【新大人研レポート シニアから新大人へ、新型50・60代に。シリーズ】

- No.17 その① 新大人はこれまでの同世代と違う“新型50・60代”(2015.10.8)
- No.18 その② 新大人は“新型50・60代”であり、それをリードするのは「自然体大人女子」(2015.10.13)
- No.19 その③ 新型50・60代は「新しい大人のライフスタイル」創りへ(2015.10.23)
- No.20 その④ 新型50・60代は「介護予防」「健康向上欲求」の意識高く(2015.11.12)
- No.21 その⑤ クロスジェネレーションを求める新型50・60代(2015.11.18)
- No.22 その⑥ 新しい大人世代を象徴するのは「音楽」(2015.12.21)
- No.23 その⑦ 新しい大人世代、依然として続く「夫婦すれ違い」(2016.1.15)
- No.24 その⑧ 新しい大人世代は「夫婦二人消費」におカネをかける(2016.2.23)
- No.25 その⑨ 新しい大人世代の孫育ては「近居・孫友」の新スタイル(2016.3.2)
- No.26 その⑩ 新しい大人は「ネットショッピング」&「3世代SNS」(2016.3.30)
- No.27 その⑪ 新しい大人世代の食の意識と行動 60代、夫婦ふたりの「アラカルトグルメ」(2016.4.27)

「博報堂 新しい大人文化研究所」(新大人研)について

「新大人研」は、博報堂エルダービジネス推進室(2000年設立)を前身とし、2011年2月に「エルダーナレッジ開発 新しい大人文化研究所」を正式名称として設立されました。15年間のナレッジの蓄積を持っています。従来の中高年齢層の間で一般的であった意識やライフスタイルとは異なる、新しい40～60代が誕生しています。新大人研では、年を重ねるごとに前向きな意識を持つ、この新しい中高年齢層生活者を「新しい大人」と名づけ、少子高齢化社会にプラスのインパクトを与える重要な存在として調査・研究しています。さらに、2015年からはクリエイティブなどの実践機能も本格的に加え、よりよい未来のためのソーシャルイノベーションを起こす社会のエンジンを目指しています。

■新大人研著作は台湾版・韓国版など海外へも

